

現場の記録から

東京北事業本部 江東事業所 渡辺 直樹

なかなか見つからなかった漏電、 問診を重ね、傾聴することで発見

一般的なビルや建物では、電気に関連するもの以外にも、大小含めてさまざまな工事や作業が日常的に行われています。電気にまったく関係なさそうな工事や作業を行っていても、作業者の不注意によって危険な電気事故を起こしてしまう場合が往々にしてあります。今回は、そうした何気ない作業が、電気火災を引き起こしそうになっていた事例を紹介します。



ある日のこと、私が担当していたお客様の電気設備において低圧電路の絶縁状態に異常（漏電）が発生しました。24時間365日監視している当協会の絶縁監視装置から警報を受信し、総合監視指令センターから私に対して対応指示がありました。急いで準備し、そのお客様へ向かいました。



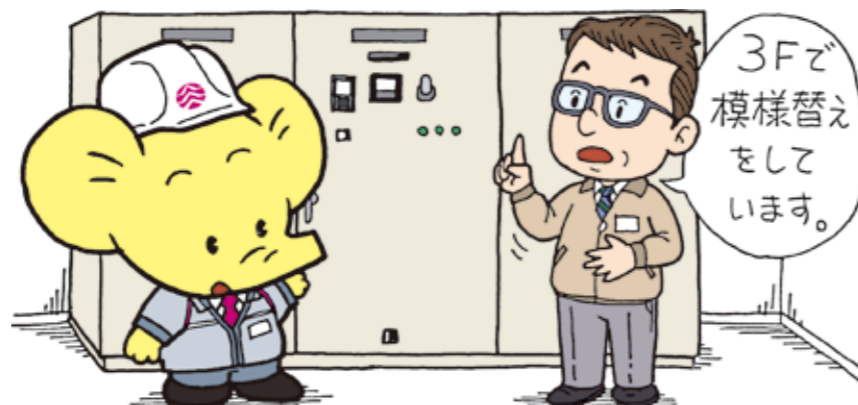
現場に到着後、私は早速お客様に対し、いつもと違うところがないか、また電気で何かお気付きの点がないかを伺い、確認しました。すると、お客様から「電気ではないが、3階フロアで内装の模様替えをしている」との回答をいただきました。

そこでまず、原因を探るためキュービクル側から調査を開始しました。電灯変圧器のB種接地線の漏れ電流をクランプリー

クメーター（漏れ電流を測定する機器）で測定したところ、規定値を上回る漏れ電流を確認しました。

私は、先ほどお客様から内装の模様替えを行っているとの情報を得ていた3階フロアが原因ではないか、と考えていました。キュービクルの3階電灯主幹回路の漏れ電流をクランプリークメーターで測定してみると、案の定、規定値を上回る漏れ電流を確認しました。この時点では、早期に漏電回路が発見できたことで、すぐに危険は取り除けるのではないかと考えていました。

早速、3階へ移動し、電灯分電盤を使って調査を開始しました。やはり原因はコンセント回路。規定値を上回る漏れ電流を発見しました。



さらに、どのコンセントが原因であるかを特定するため、フロア内での調査に移りました。お客様にご了承をいただき、当該回路のブレーカーを開放して通電していない壁コンセントを調査しましたが、特に異常は見当たりませんでした。

考えを変え、模様替えをしている作業者に問診を行ってみました。すると、「先ほど机のレイアウトを変更したが、机の下にもフロアコンセントがあった」とのことです。フロアコンセントの調査を開始しました。

しかし、フロアコンセントの

数が多く、なかなか異常箇所が見つかりません。

コンセントを1つ1つ調査し残り2つとなった時に、ようやく異常を発見。机の脚がフロアコンセント上部に乗り、その重みでフロアコンセントが床に沈み込んでいるではありませんか。

「これだ!」と思い、詳しく調査しました。すると、内部のコンセントが破損しており、配線も外れている状態を発見しました。また、コンセントボックスの内部に黒く焦げた跡がありました。

お客様にも、目視で状態を

確認していただきました。お客様からは「当該フロアコンセントは使用しない」、という回答が得られましたので、フロアコンセント配線の絶縁処理を実施。漏れ電流が規定値を下回ったことを確認して、復旧となりました。

今回の事例は、コンセントボックス内に黒く焦げた跡があったことから分かるように、下手をすると漏電火災が発生する可能性がありました。また、お客様にご協力いただきながらしっかりと対話したことが、原因の特定に繋がったと手ごたえを感じました。

私たちが定期点検などを実施するとき、お気付きの点があれば、些細なことでも結構ですので、ご相談ください。そうすることで、私たちが一見しただけでは気付かないような異常を発見できることがあります。ぜひ、ひと言お声がけくださいますよう、お願いいたします。

